

ハワイ日本文化センター

口述歴史インタビュー

話し手: 当山末子 (ST)

聞き手: 脇 洋子 (YW)

その他の出席者: ラア照美 (TL)

伊元幸恵 (SI)

座安知代 (CZ)

実施日: 2018年9月1日

転写者: 脇洋子 (YW)

註: () は不明瞭な言葉、英語、漢字、又は読み。

[] 内は転写者による註。

YW: 本日, 2018年9月1日にお忙しい中、当山末子様はじめ、ラア照美様、伊元幸恵様、座安知代様にハワイ日本文化センターにお集まり頂き誠に有難うございます。これより当山末子様はじめ皆様の貴重なお話を後世に伝えるために、口述歴史インタビューを記録させて頂きたいと思ひます。インタビューをさせて頂きますのは私、ハワイ日本文化センターボランティアの脇洋子です。どうぞよろしくお願い致します。

それでは、当山末子様、お名前、生年月日、お生まれになった場所等をお教えてください。

ST: 私は当山末子と申します。

YW: お生まれになったのは？

ST: 1936年7月15日。

YW: 何処でお生まれになりましたか？

ST: 沖縄です。

YW: 今は何処にお住まいですか？

ST: カネオヘです。カネオヘ、ハワイです。

YW: カネオヘにお住まいですね。それではご両親のお名前を伺っても宜しいですか？

ST: はい。父が伊元武男。母は伊元ウシ。

YW: そうしますとご両親がハワイへ来られたのですか？ 沖縄から。

ST: はい。何時来たのかは分からない。

YW: いつ来たのかは分からないけれど、ハワイへ来られたのはご両親ですね。

ST: はい。ハワイへ。

YW: 働きに来られた。

ST: 夫婦できたのではないみたいですよ。初めに父が来て、で、ここで母と知り合っ。。。

YW: ああ、ここでお母様と知り合っ。。。

ST: はい。ここで母と知り合っ結婚したそうです。

YW: そうですか。それからずっとハワイに住んでいらして。

ST: ずっとハワイに住んでて7人の子供が出来ました。

YW: ああ、7人の子供が出来たのですか。お名前分かりますか？

ST: 伊元武吉と、盛康、盛徳、信夫、繁雄。。。

YW: 7人ですからね。今のところ5人です。

TL: 美代子叔母さんはもっと上だった。

YW: いいです、いいです。順番は。

ST: それから、孝常、そして、今何人ですか？

YW: ええと、今、6人？

ST: それから一人シスターが。。。

YW: ええと、とにかく7人兄弟で。後で書きますね。覚えられないですよ。

ST: そうそう、とにかく7人ですから。

TL: それで（叔母さんは）沖縄で生まれたんだ。

YW: え？こちらで結婚したのだから、沖縄で生まれたというのは変じゃないですか。

ST: それは私ですよ。帰ったんですよ。うちの両親は7人の子供を連れて沖縄に帰って、そして戦争になって。母は死ぬし、兄も死ぬし。

YW: 武男さんとウシさんは子供を7人連れて沖縄に帰られた。それで末子さんはそちらの方で生まれて。

ST: だから私は。私のすぐ上の兄まではハワイ生まれ。だから私からの分は何もないですよ。沖縄で。

YW: では、沖縄で生まれたのは末子さんと他には？

ST: もう一人。留美子というのがいました。

YW: 留美子さん。

ST: はい。妹が一人。

YW: 二人生まれた。それで戦争になった。では、戦争の話はまた後程。そうしますと、末子様のお祖父様、お祖母様のお名前はわかりますか？

ST: 分かりません。

YW: それでは後で家系図を拝見して。じゃ、おじい様とおばあ様はずっと沖縄で。

ST: 沖縄で。ハワイへ来ていません。皆農業でね。

SI: 皆農家でした。

YW: じゃあ、お父様も沖縄で生まれて農業してたけれど、ハワイに来られた。

ST: はい。何歳かになった時。大人になって。一人でハワイに渡った。

CZ: 長男は家を継ぐでしょう。おじいさんおばあさんの長男はお家継ぐでしょ。だから長男は海外に出さないわけ。

YW: 普通はね。

CZ: だから二男とか、下のほうから。たまたま二男だった訳、武男さんは。

YW: それで武男さんがハワイにいらして、どういうお仕事なさっていましたか。

ST: やっぱり初めは砂糖黍でしょう。

YW: 砂糖黍ですね。はい。普通日本からハワイに来るとまず砂糖黍なんですよ。普通三年が契約期間なんです。それが終わると砂糖黍を出る人もいるし、出ない人もいるんですが。

ST: そこが私はっきりしないんですが。あの、牛乳作っていたそうですよ。そしてね、私はそれを商売にしてたかと思うけど、この知代の話では飲むだけ。子供が飲むだけ。

CZ: 違う違う。あのね。。。

YW: 彼女のお父様はハワイに砂糖黍で来る。まあ、それが普通。

CZ: お金儲けてね。お金儲けて沖縄へ帰った訳。

YW: 帰ったんですか。

CZ: 昔の人はここに骨埋める人、金儲ける人とあるわけ。それで金作って沖縄帰った訳。で、伊元武男さんは乳牛をかってね。。。

YW: 沖縄で。

CZ: 沖縄で。だから沖縄帰った後は乳牛飼って、だから、うちの父親なんかは草刈りして、牛乳瓶を洗って、あさと[具志頭村の字安里村]とかに配達したそうです、うちの父ちゃんなんかは。

YW: 帰った年が分かるといいですね。7人を連れて帰った年。まあ、戦争の前ですけど。

ST: そう。

CZ: 戦争始まるまえにお父さん亡くなっているね。

ST: そう。父は戦争で亡くなったのではないですよ。

YW: その前に亡くなった。

CZ: でもお母さんは戦争の月に亡くなってます。お祖母ちゃんは。

YW: 子供だけ残っちゃたって事ですか。

CZ: 長男でハワイ来てるでしょ。だからそれを聞いて、訃報を聞いて、母親が亡くなったて聞いて、こんど呼べなくなるじゃない。本当は皆を呼び寄せる為に長男、次男が先にきて、お金儲けて皆を呼ぼうと思っていたんだって。

ST: ああ、長男、次男は。

CZ: 武吉さん、盛康さんはね。でも、お母さん亡くなったので、小さい子供たちだけではと思って、自分たちも沖縄へ帰らなくちゃって、帰ったって。

ST: その帰るときにね、難しかったらしいね、ハワイから。

CZ: あなた達は二重国籍だからアメリカ国籍とるか日本国籍とるかいうから、帰るから日本国籍とったって。

ST: それで破棄した訳。

CZ: そう。アメリカンチズンをね。

ST: そこは私も聞いている。だけどね。。

YW: じゃ、ちょっと戦争の話は後で。今はお父様が沖縄に帰って、乳牛を飼うというお仕事をなさっていて、戦争前に亡くなられた。という事は7名連れて帰られたお子様は沖縄に残っていたという事ですね。

ST: そうそう。留美子さんも。

YW: そうすると戦争前に9人子供が残されたという事ですね。

ST: はい、そうです。

YW: そうしますと末子様は沖縄で生まれたので、戦争前までの沖縄で過ごされたどのような記憶がありますか。

ST: ただお母さんが牛乳絞ったのを大きな兄達が二人いましたから、大きなお鍋に沸かして、私もちょうど8歳か9歳になっているんですが、その牛乳瓶を洗ったりなんかしたのを覚えています。そしてらもうすぐ戦争でしょう。

YW: ああ、そうですね。そうすると学校はどうなさいましたか。

ST: 学校はね、沖縄でアメリカの兵隊がアタックしに来た時に、日本からの兵隊さんが沢山送られてきたんですよ。

YW: それは戦争が始まって。その前はどうか？

ST: 前は、私何にも知らない。

YW: 覚えていない。

ST: 何があったかも覚えていません。

YW: 学校は？

ST: 学校はその日本からきた兵隊さん達にとって使っていました。だから私達は学校へは行けなかった。

YW: でもその戦争の始まる前ですが、学校は行きましたか？

ST: ありました。私は8歳の一年生は行きました。小学校は行きました。姉たちも何年生か知らないがいきました。

YW: 名前わかりますか、小学校の。

ST: 具志頭（ぐしちゃん）小学校です。

YW: 具志頭。

ST: 道具の具。志。頭。そう、そこが学校でした。

YW: 頭はちゃんという発音をするのですか。

ST: そう。ぐしちゃん。

YW: 具志頭小学校。

ST: でも、最近変えてぐしかみ。でも具志頭ももうないの。

YW: 8歳、9歳というともうすぐ戦争ですよ。

ST: そう、ちょうどその時アメリカと日本の戦争始まっていますよね。1941年でしょ。

YW: そう。1941年12月に戦争が始まったのですが。。

ST: パールハーバーに。その時沖縄には何の変化もない。静か。静かだった。沖縄に攻めてきたのは。。

SI: 終わりだったでしょ。

ST: そう、終わりがけていた。

YW: 終わりがけですか。それまでは全然何もなかったのですか。沖縄には。

ST: だから私達はちゃんと小学校も行かれました。うちの妹はまだスタートしていなかったね。2歳下だから。私は一年生になってたから行きました。そして、一年が丁度済んだ時にこのアメリカの B29 がアタックするようになってきて、私たちは学校には行けない、そして、もう逃げ回って。。

YW: それは二年生の時ですか？

ST: 二年生に入る前。だから、私たちの歳ではだれも二年生に入っていません。一年生で済んで卒業式はしたけど。。

YW: 1945年に [戦争が] 終わったので、その前ですね。何月頃かしら。

SI: 叔母さん、何年生まれですか？

ST: 1936年。

SI: 1936年から8足したら。。

YW: 1944年。

ST: でも、私たち2年生も3年生も行っていない。戦争がすんで戻った時に私たちはもう4年生になっていましたから。

YW: でも、1941年に戦争が始まった時はまだ静かだった。で、学校にも行ってた。

ST: あの時大人、うちの母なんかもそんなに感じてなかったはずよ。アメリカと戦争が始まったというのは。だから、続けて牛を飼ったり、牛乳を作ったりしてたけれど、だけど、その1942年か3年になって、戦争が見えて来たんですよ。アメリカがアタックするのがね。だから、学校はねもう休校になっていました。

YW: 休校になっていた。1942年か3年、つまり戦争が始まってもう一年か二年経っていますね。その時は日本の軍隊が来ましたか？

ST: 来ました。そして、その私が学校を休んでいる間、私たちの学校はみな閉鎖になっていました。兵隊さんが皆使っていました。

YW: 学校を使っていましたね。それは、最初に日本の軍人さんが来たんですね。

ST: はい。

YW: それで兵隊さんが来て学校を占領したのですね。

ST: はい。宿舎になって、私たちは学校に行けない、行けないどころじゃない、その内ボンボン、ボンボン落ちてきましたから。

YW: 爆弾が落ちてきたのはアメリカの B29 ですね。

ST: そこら辺まで空母で来てるわけですよ。

YW: 空母が来てるのですね。

ST: 飛行機はそこら辺に止まれないから。。。

YW: 空母が来て、それから飛行機がきて。。。

ST: だから、それが始まったから、沖縄にも、だから、学校どころじゃないですよ。皆逃げ回って、防空壕を探して、そこに隠れて。。。

YW: あの、沖縄って、自然の洞窟。[沖縄語でガマ]

ST: あれ（ガマ）があるんですよ。

YW: 洞窟というのが沢山あると聞いてますが、そこに逃げましたか？

ST: 私たちもそこに逃げました。そしてね、初めは小さい所に逃げていた。家に近かったから。でも、ボンボンあまり飛んでくるものですから、あの、空襲とか艦砲射撃とか、小さくても艦砲射撃なんてことば覚えていた。だから隠れていた。そして、小さい所は危ないから今度大きい所に入った。大きい防空壕を探して入った。

YW: 防空壕という言い方をしました？

ST: しました、しました。防空壕。そしたら、隠れていて、今度は日本の兵隊さんはこの防空壕も必要だって。あなた達は違うところに移りなさいって、言われたそうです。それは私、後で聞いた。大人になってから。そしたらね、母も帰って来なくなっていたし、防空壕に。家に食事を取りに帰って。そのまま帰って来ないし。おじさん達は、“家がボンボン燃えていたから多分あの中に入って亡くなったはずだって” 言うの。兄さん達に話していたんですけど、私たちは全然信じない。“お母さんい

つ来るの？” “その内来るよ”。それしか覚えていない。そしたら、その防空壕というか、ガマって言うんですよ。その穴の事を。

YW: ガマ。

ST: そしたら、私の兄弟は両親が亡くなっちゃってるから、おじさん達が、“あんた達は自分と一緒に来るんだ”って言って連れて歩いていかれたのが、沖縄にある山、じゃなくて、森林。。

YW: 森林？ ジャングル？

ST: ジャングルみたいな所あったんですよ。私は知らなかったけれど、そこまで行ったんですよ。

YW: おじさん達と一緒に？

ST: 二人のおじさんと一緒に。そのファミリーも。そしてね、そこまで行くのに皆歩いて行ったんですよ。物凄く遠いですよ。私たちの生まれた所よりそのジャングルのある所は。そこまでね、昼間はね、見えるからって森林に隠れて、夜になったら歩くんですが、その時から食べる物は全然無い。特に私たちみたいに母親がついてきてないから何にも食べる物は持っていない。もうそれから始まって。。

YW: お腹が空きましたね。

ST: ジャングルでの生活が何か、そんなに長くはなかったと思う。

YW: そんなに長くはなかった。

ST: なかったと思うんです。忘れました。

YW: だって食べなかったら。

ST: ノー。それと、45 年には戦争済んでますから、そんなに何か月も長くはなかったかも知れないけど。でも、まあ、食べる物はもう一切れもないっていう感じの。

YW: でも、何かは食べてましたでしょう？

ST: あのね、ソテツって知ってます？

YW: 蘇鉄。知ってます。

ST: あの真ん中のボディーね。あそこの中に入っているのね。いもみたいになってるんですよ。だけど、毒があるって。それを叔母さん達が家の兄たちと話しているのを私ちょっと聞いたの。ちゃんと切って、

水に浸して、毒を出してから食べるんだよって。それを食べたんですけど、本当においしくもない、なんともない、でも、お腹にね何かいれないと、それが私の戦争での一番辛かった事です。

YW: うーん。

ST: それと母がついてこない。来る来る来ると言いながら。

CZ: ヤンバル [国頭。沖縄の北の地方] 行くまでお母さん死んでると知らなかった？

ST: 知らない。イサオイモト[屋号]の叔父さんが、信夫に多分死んだよと。私の家までお母さん迎えに行ったら、家がボンボン燃えていたってさ。あれを見ておじさんは、うちの兄に、お母さんはあの中で死んでるから。。。

CZ: 叔母さんはそう聞いた？ 私はおばあさんからはね、お母さんは夜になったからお湯を沸かすために急須を家に取りに行こうとして死んだって。

ST: それは戦争後。探したのは。

CZ: だからお家がボンボン燃えていたのは、中で死んでいたのじゃなくて、流れ弾に当たって死んだんだって。

YW: ああ、外で。

ST: でもね、おじさん達は燃えていた家を見てあそこで死んでると思った。そして戦争済んで後、4 5 年に後片付けが始まったのよ。

CZ: ああ、それで分かった。

ST: 青年達が皆集められて。そしたらね、あの時に誰かが探して、うちの母の遺体を。それを信（夫）に知らせて、それを信が見に行ったら、家にあったチューカー（急須）とお母さんが着ていた着物の柄、覚えていたって、信が。だからあの時からナカイモト[屋号]のお母さんは死んだって。でも、私は信じなかった。見てないから。だからね、いつもね、9 歳 10 歳になっていましたから、悲しい物語になって、母さんその内私たち探しに来るからって、ずーっと思っていました。でも、うちのもう一人の姉が見たっていうから、遺体をね、着てる物で分かったって。覚えていたってね。だから、その時はもう皆分かって。

CZ: 不発弾っていうか、流れ弾に当たって、でも急須を持っていたって。

ST: それを持っていたのはね、うちの母には兄さんがいたのよ。年寄りの兄さんが。その人、昔は年寄りはお茶だ、お茶だ、いつもお茶でしょ。

CZ: だからちょっと暗くなってからね、家に取りに行ったので、帰りにやられたの。

ST: 彼女の兄さんの為に。それだから、本当に足の悪い、片方の足の悪い、私たちにとっては叔父さんですよ。言いましたよ。その人の面倒をうちの母が見てましたから、夕方になったらお茶を沸かしてくる。あの頃まではそうしてまだ食べる物があつたんですよ。でもその壕から逃げたら行くところはもう何にも知らないところ。ジャングルの中。

YW: そのジャングルの中をですね、叔父さん達に連れられて歩いて行って、で、どうになりました？

ST: ジャングルの中で木の葉っぱで屋根みたいなの作って、その中に暮らしてました、私たち。

YW: 暮らしていたんですか？

ST: もう本当に食べた物も覚えていません。多分なかった。そして知代のおばあさんがね、私達を戦争が済んで後、救い出しに来たみたいですよ。

YW: そうすると暮らしたのは戦争が終わるまでですか？

ST: はい。終わった。そして、戦争が終わって。。。

YW: 終わった時もまだそこにいて。。。

ST: はい、まだそこにいました。そしたらね。。。

YW: 終わったってどうして分かりました？

ST: 外からその時にハワイの二世だっていう兵隊さん達がね、私子供心に覚えている、ハワイの二世という人達がね、カタコトの日本語で、“戦争は終わりました。出てきなさい”って。言ってたそうです。でも、あの時うちの姉さんはハワイで何年か暮らして。。。

CZ: 美代子さん。

ST: 美代子姉さん。ハワイで大きくなってますからね。多分姉さんは学校も少しはいつてるよね。だから英語が少し分かったって。そう、言ったんですって、姉さんが、叔父さん達に。戦争は終わったって。もう、出ようって。そしたら、“だめ、だめ、出たら殺される”って。始めは皆出なかったそうですよ、山の中から。でもね、うちの二人の兄さんがね、マラリアって言ったかしら、マラリアになっているって。

熱が出て、震えて、その繰り返し。一日に何回か。それだから、皆が、あの人たちマラリアになっている。うちの家族だけでなく、他の家族も。おじさんの家族も。一人一人死んでいったんですよ、あのジャングルの中で。蚊に刺され。

YW: マラリアで。

ST: そしたら、うちの二人の兄さんは、もう捕虜になって出ようって。でもね、二人ともマラリアに罹ってもう本当にのびちゃてるから。その山の上でね、アメリカの兵隊が軍のトラックを持って待ってんですよね。上がって来いって。この森から出ようって。だから、そこへ上がって行くのが大変だったそうです。私達はまだ小さいから、誰かが手を引っ張って何とか上がって行きたい。でも、兄さん達は換わりばんこにおんぶして、歩けない兄をね。多分、この四番目の兄ですよ、一番酷かったのは。上まで行ったんですよ。兄さん達が上がった時は、私達はもう山の上に上がっていましたから。それで、トラックの中に皆放り込まれて。下までいって、そこに赤十字の車が待っていて、テントなんかも張って。そこで私達は皆、あの、体に DDT と言ってましたかしら、それを撒かれて。あんまりにも、蚤や虱が湧いていたんですよ。それをちょっと過ぎてから、また、ある部落の方へ皆まとめて收容されたんですよ。まだ、自分の故郷へは帰られない。その時におばさんが私達を連れに来たらね。末子はまるくお腹だけ膨れて、骨と皮だけになってたね、って話をするんです。

YW: 栄養失調だったんですね。

ST: 栄養失調。そういう話は聞いたことあるんですよ。お腹が丸く膨れていたって。ちょっと恥ずかしかったけどね。ああ、私もそんな風になってたんだってね。これは、ちょっと叔母さんの話を聞いて。だから、本当に、もう、大変、戦争は。

YW: それで、その赤十字のテントでしばらくいて。。。。

ST: そう。そしてその中で私の姉さんと妹は死んだんです。もう、遅すぎ。栄養失調でね。だから、軍からいろいろ食べ物を持ってきてくれたそうですけどね、もう、遅かった。だから、寝てたまんま。その赤十字のテントの中に一人ずつ、寝台？兵隊さんが運んで歩く。。。。

YW: 担架。

ST: 担架。一人ずつ、私もそれに寝てたんですよ。妹たちも寝てて。兄さん達は男の人だから次のテントにして。そして朝起きたら妹は足をね、こうやって広げたまま硬くなっていました。

YW: 食べ物がなかったから。

ST: 食べ物がなかったのは私達が一番酷い目にあつたみたいです。そうでない人もいたって。すぐ捕虜になって、すぐ食べ物があつた人もいるみたいで。だから、もう、本当に。。。

YW: それで、赤十字の後は何処に行きましたか。

ST: それから、少しづつ、私達が生まれ育つた部落の方へ移されたんですよ。その時に、このおばさんというのは叔父さんの奥さんなんですけど、その人の家に引き取られて、そして、自分たちの家が建てて貰える、本当の茅葺のね、みんな、どこの家でも同じ。一部屋だけの。その部屋をアメリカの軍が建ててくれたんですよ。家の材料になる元の物をね、持ってきて組み立てれば。それを持って来た時に家の姉たちは、それを建てて、屋根はね、山の方にいくらでもある、藁みたいな草、萱、草がね生えていますから。それを切ってきてそれで屋根を作つて。どこの家も皆な同じ形の家。そのうち、私達家族は自分の家が建つたものだからそこに来た。その時に私はね、本当に寂しかった。母親はいない。女きょうだいはいない。兄さん達だけで。その兄さんの友達が来ては酒を飲んだりしてね、もう皆 18, 9 になっていましたからね。酒を飲んでうるさいし、なんていうか、気持ち悪いし、怖い。そんな生活してましたよ、一時は。そしたら、しばらくたって、うちの兄、武吉が、芳子姉さん、お嫁さんを日本からもらって連れてきたんですよ。私達が戦後うちの屋敷に戻つたころ、日本で奥さんを探して東京で、静岡の人ですけど、で、帰つてきたんですよ。そしたら、私ははじめにお姉さんが出来て、喜んで、喜んでね。あれからは、このおばさんのところにもめつたに行かないようになって。そしたら、この照美が早々と生まれてきて。だから照美はちょうど終戦直後の子供なんですよ。でも、姉さんは大変だつたみたいです。まだ、食べ物が足りなくて、沖縄では。それで照美は栄養失調みたいになってるって言われて。

TL: 死ぬかもしれないって。

YW: そうですよ。食べ物なかったから、乳飲み子は大変ですよ。

ST: そうですよ。食べ物なかったから。

TL: それで私は育たなかつたんじゃない、おっぱいがなくて。

ST: でも姉さんは良かったよ。おっぱいはよく出つたから。

TL: ああ、そう。じゃ、何で私栄養失調になつたの？

ST: まあ、他のフツド(food)がなかつたんで。まあ、そんなこんなで。

YW: それでやっと戦争が終わりましたね。

ST: それで私はやっと家庭が出来ました、兄さんたちと。

YW: それではその後、末子さんはハワイに来てますが、それはいつ頃ですか？

ST: それはね、私が娘時代のもう20歳過ぎたころ、沖縄で、私の里で結婚するのは良い所でない
というか、本当に農業ばかりで、何の仕事もない所ですよ、私の村はね。だから、その時に二人
の兄は先に来てました。ハワイで仕事したほうがお金が儲かると聞きました。そこで嫁さん呼び
寄せて。そして、今度は私にハワイに来ないかって、スポンサーになってくれて。

YW: 誰がスポンサーに？

CZ: 信夫さんと孝常さん。

YW: 信夫さんと孝常さんですね。

ST: 信夫だけですよ、まだ。

YW: 信夫さんがスポンサーになってあげるからハワイに来ませんかと。

ST: 私も沖縄の農業の生活もちょっと好きでなかったから。来たんですよ、呼び寄せてもらって。

YW: その時末子さんはまだ結婚していなかった。

ST: してなかった。

YW: してないで、ハワイに来た。

ST: ハワイに来て兄さんの所に世話になって。。。。

YW: 当山さんと結婚した。分かりました。やっと、長いお話で大体分かりましたね。それでは、今度は
お兄さんの武吉さんと盛康さんのお話に移りたいのですが。何方かお話を。武吉さんは9人兄
弟の中で、（沖縄）に戻りましたね。そして、またハワイに来られた訳ですね、戦争の前に。

TL: はい。19歳の時か。戦争の前に。

ST: 儲けなきゃいけないからでしょう。

TL: それと、多分故郷だから。ここで生まれているから。ハワイが自分の故郷。

YW: それは戦争の何年ぐらい前ですか？

TL: 一年半未満に来た人は収容されたといわれてるから、そのぐらいの頃。

YW: じゃあ、戦争直前ぐらいですね。40 年ぐらいかな。19 歳でハワイに戻った。

TL: ちょっと待って。父は何年生まれ？ 大正 9 年（1920 年）で言った。

YW: その時盛康さんも一緒ですか？

TL: 分かりません。

YW: いずれにせよ、二人は戻って来られた。盛康さんもハワイ生まれですか？

TL: そうなんです。だから中学卒業してもう青年になっているから、ハワイの方が儲けると言うことで、小さい子供とか母親を呼び寄せようとして、自分たちが先にきた。

YW: 先に来た、二人でね。

TL: そう聞いています。

YW: それが多分 1939 年。とにかく戦争前。

TL: 一年半前に来たから。だから捕虜になったって。

YW: そう、その所なんです、私が伺いたいのは。武吉さんと盛康さんが戦争前にハワイにきて、その時仕事は何をしていたと思いますか。

SI: 酪農よ。

YW: 酪農？

SI: 牛を飼っていて。

YW: どこで？

SI: クリオウオウ (Kuliouou?)

CZ: クリオウオウだと思う。だから父ちゃんが寝るところと馬小屋は壁一つだった。

YW: 馬ですか、牛ですか？

CZ: 馬もいたんでしょうね。あそこ見に行った、父ちゃんと一緒に。

YW: そこで酪農をやっていた。

CZ: 昔はそこでやって、休みの時は映画館、歩いて映画見に来たって。

ST: ホノルルまでね。

YW: その酪農をやっていたまだ若い青年がですよ、なぜ捕まったのかということなのですが。このリスト（日系人収容者リスト）を見ると武吉さんはカーペンター(carpenter)と書いてあります。つまり、大工さん。じゃあ、違いますね。

CZ: 違う。

YW: 盛康さんはファーマー (farmer 農業) って書いてあるけど、こちらも違いますね。

CZ: 両方違う。

YW: 二人とも違う。二人とも酪農ですね。

CZ: 多分、自分の寝床の壁一枚でこっちには叔母がいて、で、こういうの。あの、ボタンマッシュルームってあるじゃない。肥やしあるじゃない。ポコポコ。だからうちの父ちゃん嫌いって、マッシュルーム。

YW: ハハハ。(笑い)

CZ: 肥やしのところにポコポコ、ポコポコ。それとハワイにはパイナップルあるじゃない。でも熟しすぎて芯しか食べなかって、うちの父ちゃん、言ってたよ。

YW: でも、戦争の前に一年半しかその酪農の仕事をしてない時に捕まった。

TL: 戦争が勃発したので、アメリカからすると日本から来た人はちょっと怪しいって。

YW: ただ怪しいと。ただ日本人ということで。日本から来たという事で捕まったの？

TL: そう、日本人という事で。一年半未滿にハワイに入ってきたから。で、調べられて、もう、何にも持たないでパツと連れていかれた。独身だったから。。。

YW: いつでしょう。何時連れていかれたのでしょうか。

TL: だから、その仕事ちゅうに。何年かは分からないけど。聞いてないけど。

YW: 真珠湾あってすぐでしょうね。

SI: 真珠湾あってすぐ。

CZ: うちの父ちゃんは、父親は、慈光園のよせもり開教師とか警察官のグループだったって。

YW: グループって？

CZ: その、捕虜になって収容された場所が。それで、警察官とか坊さんとかのグループだったので、レイ
ンボードライブのいふく(伊福?)さんが、あなたの母さんは戦争で亡くなったって聞いたわけよ。聞
かされた訳。その場所で。それで、うちの父ちゃんは隅っこででしく泣いていたわけよ。母ちゃん
が亡くなったって聞いて。泣いていたらよせもり開教師が、“どうして泣いているの”って聞いたので、
知らせがあってお母さんが亡くなったと聞いたから泣いているといったら、5、6名の坊さんと呼
んでお経あげたって。

TL: で、その時うちの父ちゃん、武吉はいないの？

CZ: 居ないの、この場所には。

SI: 違うグループだったって。

CZ: 違うの。自分は警察官とか坊さん達のグループにいたって。

YW: そのグループは何処の収容所か分かりますか？ サンドアイランド？

CZ: 多分、サンドアイランドだと思う。多分ね。

YW: 記録によると、一番最初は大体皆サンドアイランドに行くんです。

CZ: 何処か知らない。

YW: サンドアイランドだと思います。

CZ: 昔はそこをプウロアと言っていたのかもしれない。そうやって、お経あげてもらって、有難うでしょう。
で、恩があるから戦後私はもうハワイに来てるからお礼言いたいとうちの父親が慈光園へ行きま
した。

YW: じゃ、ちょっと戻りまして、サンドアイランドで捕まった人はその後大体本土に送られるんですが。。。。

ST: はい、行きました。聞きましたよ。

YW: 記録で見ますと、まずジェローム (Jerome Relocation Center) というところに行っているのです。
聞いています？

TL: アーカンサス。(Arkansas)

YW: ジェロームにしばらくいて、盛康さんはその後サンタフェに移っているんですね。武吉さんもサンタフェ
だったかしら。ちょっと分からないのですが。

ST: 分からない。ジエロームは聴いてますが、サンタフェは分からない。私は聞いてない。

YW: 分からないですね。

CZ: メインランド行ったけど、自分は独身だから、妻や子がないから、この中には映画館もあって、映画見に行ってたって、うちの父親は。

YW: メインランドの収容所というのは割と自由で、外には出られないけど、中では映画館があったり、学校作ったりしているんなことをしていたのです。

CZ: あの、やはり妻や子がいたら大変でしょ。面倒見るのが。自分は独身ものだから、自分だけの事だから、映画見に行ったり、やってたって。

ST: 兄さんだってまだ独身ものだったよ。

CZ: だから、中には家族で収容されている人いるじゃない。そういう人よりは自分は自由だったと。

ST: でもハワイではそんなに収容されていない。

YW: そうです。(ハワイで) 収容された人は皆アメリカの FBI が戦争前にリストを作っていて、戦争になったらこの人達を捕縛するという事は分かっていたのです。

CZ: おお。

YW: だから爆弾の落ちた真珠湾、その当日の夜。。。。

SI: その夜もう皆バアーと集められて。

YW: そう。集められてアラモアナの所(移民局)に行っ、それからサンドアイランドに入れられた。それで、あそこも大勢になってきて、皆本土に送られた。

SI: スパイではなかったけど、一年半前に来たので。。。。

YW: それで、リストにあった人で捕まったのはハワイでは約九百人。なぜ全部で二千人以上になっているかという、後になって、ここにいる家族はもう生活出来ないじゃないですか。お父さん、お兄さん、叔父さん、皆、捕まって。

ST: ああ、そう。

YW: それでアメリカの政府は一緒に行っても良いとって、後から家族は収容所へ行ったのです。

ALL: ああ、そう。

YW: だから、ハワイから収容所に行ったのは全部で二千何人です。でも、数としては本土の西海岸の12万人に比べたら少ないんです。

ST: ああ、ハワイは。

YW: というのは、ハワイは日本人、日系人が多く、人口のほとんど40%ぐらい。戦前、爆弾の落ちた時。40%の人を全員収容するのは、無理。出来ない。

ST: 場所がない。

YW: それをアメリカは分かっていた。それで、リストを前もって作っていた。

CZ: だから一年半以内に来た人は、“ちょっと”って。。。

YW: そうね。だから、多分このお二人は後になってリストに加えられたと思います。というのは、最初にリストに載っていたのは、お坊さんとか、学校の先生とか。。。

SI: 警察官とか。

YW: それから、領事館関係で出入りしていた人とか、それから新聞社。その人達の名前はずらずらと載っていたけど、今伺ったお話ではこのお二人、武吉さんと盛康さんは運悪くも戻ってきてしまった。戦争直前に。

ALL: そう、そう。

YW: 戦争になるって分かっていないですからね。たまたまそれが、戦争直前だったので怪しいなと思われた。

SI: それでもって、また市民権捨てるっていうからね。

ST: こんな戦争になるとは思っていないしね。

TL: だからね、お母さん亡くなったでしょ。だからこの二人は、長男と次男は覚悟を決めたわけ。小さい妹と弟しかいないから。自分たちは沖縄に帰って面倒みなくてはならないというのがあったんじゃない。で、昔は船で東京へ行きますよね。

YW: あ、帰ったて言うのは戦後の話で。

TL: 戦後でしょうね。終戦後。

YW: お二人は帰ったのですね。

TL: その時に二人は二重国籍だけど、沖縄に帰るという事は日本の国籍を取るに決まっているよね。
で、アメリカ国籍捨てた訳。

ST: その時二人一緒に帰ったの？

TL: はい。でね、東京の親の兄弟、吉本の叔母さん。。。

ST: そこで二人世話になっていたの？

TL: 一か月ぐらい居たって。

YW: でも、米国籍を捨てたといってもまたここに来ていますよね。

CZ: 捨てさせられた。チョイス オブ ワン。(choice of one) 帰るんだったら市民権捨てなさいと言われてアメリカ国籍を破棄して、東京回りして、沖縄に帰った。

YW: で、兄弟たちに会った。そして、面倒をみようよ。

TL: その時にはもう母と会っていますよね。東京で。

YW: 東京で？

TL: それはね、帰る前にうちの母が鎌倉で働いているときに知り合った。

YW: 静岡出身ですよ。

TL: 静岡だけど鎌倉で知り合って、そこが二世クラブというところで、たまたまその時に父と会って、でも、最初はね、東京の叔母さんという人が、“あんたが行くところはずいぶん田舎だよ。行くな行くな。あんたはそこで耐えられない。”それで、一度は離れたらしいですよ。

YW: ああ、そうなんですか。やっぱり辞めようよ。

TL: 辞めようよ。でも、やっぱり好きだったのでついて行ったらしい。

TL: そこで私が生まれた。

YW: (武吉さん) は美男子だったのね。

TL: みたいね。あの頃は。(笑い)

ST: ついてきたけど、あの頃の。。。

TL: だってあの頃の具志頭と言う所、ほうげんばかりじゃない。

YW: ほうげん？

CZ: 方言。そっちのお母さんは日本から行ってるから、方言、沖縄のランゲージ（言葉）知らないじゃない。えらいと思う、私。

YW: 苦労したんですね。

CZ: そこの部落の人達はね、良い悪いじゃない。よそ者をね、嫌うんですよ。

YW: やっぱり沖縄の人は本土の人という壁があるんですね。

CZ: ありますよ。あの、ちょっと劣等感があるじゃない。

YW: 何感かは分からないけどとにかく壁があります。

CZ: あります。

YW: だからお母さんはね、ちょっと苦労しましたね。

CZ: もう、皆の見世物。こうして見に来るんだって。

YW: そう。静岡の美人が来たって。

ST: 沖縄の人は、内地の人を“ないちゃー”というんですよ。

CZ: 内地の人。でも、フィリピンもフィリピーナというでしょ。でもあの頃は同じ部落でないと。。。

YW: 日本も同じですよ。広島は広島、山口は山口で集まるから。

ST: そうそう。日本人独特の。

CZ: あの中に沖縄のランゲージ(言葉)を知らない人が行ったのは私偉いと思うの。

TL: そうなの。それでね、方言で喧嘩出来るぐらいになっていたんですって、うちの母は。

YW: ああそう、偉い。覚えたんだ。

CZ: そうなの。そして、あの頃はね、車もないじゃない、自転車もないじゃない。歩いて行くじゃない。島中。村中。そう、だから、皆知ってるの。あの人うちの母ちゃんだって。皆知ってるわけ。場所も。

車もないじゃない、皆歩くから。いつもエプロンして、あの頃、下駄はいてちゃっやか、ちゃっやか歩くじゃない。

TL: 私も最近年取って叔母から聞いたんですけど、うちの母はとても勝気なところがあって。

ST: あったかもね。

SI: なにくそっていうのがね。

TL: だからやって来られたんじゃない。

YW: そうなるんじゃないですか。沖縄でこうなれば。

CZ: 武吉さんが。。

YW: 武吉さんが素晴らしい人で。

TL: でも、文句もたてていましたけれどね。こんな所へ来るなんて。

TL: 父ちゃんが大事にしてたと思う。ちょっと具志頭のお父さん達と違うところが。

YW: そうですか。

TL: という事は、やはりハワイ生まれだから。

YW: ちょっとアメリカっぽい。

CZ: 女の人を大切にする叔父さんよ。

YW: やはりアメリカ生まれ、ハワイ生まれですから。

TL: 子供たちもいつもファミリーでね、何かしなくちゃっていうのを考えてましたね、うちの父と母は。例えばピクニックとか。あの、貝を取るとか。覚えてますよ。

ST: そういう事はしませんよ、うちの部落の中では、そんな遊ぶことをしませんよ。

YW: アメリカ的ですよ、ピクニックをするというのは。

TL: そういう風にしてみたい。

YW: それで、何年ぐらいそこにいて、また皆さんハワイに戻って来られたのですか。

ST: それはもう長いね。

TL: それは、私がもうハワイに来て、父が。。。

YW: まず、照美さんが来たの？

TL: 私が叔母の所に来ました、21歳で。

YW: 叔母さんの所へ来た、照美さんがね。

TL: 私沖縄好きじゃなかったの。(笑い) それは多分母親のせいで。母親が毎日こんな所って言う。のけ者だと思っていた。

YW: それで、照美さんが最初に来た。叔母さんの所へ。

TL: 自分の姉だと思っているから。

ST: 学生としてね。

TL: 一応学生としてね。そして、そのうち、父がハワイに来たい。子供も皆来てるし。

YW: 誰が来てたの。幸恵さんも？

TL: 上から呼んだんです。どんどん呼んだ。そしたら父と母だけ残って。そしたらもう、子供のいる所へ行きたい。もちろんうちの母は沖縄で死にたくない。

YW: それは、いつ頃ですか？

CZ: 叔母さん覚えてる、いつ頃だったか。

YW: 幸恵さんはいつ来たの？

SI: 私はいつ来たのでしょうか？(笑い)

CZ: 父ちゃん母ちゃんが来たのは、私がマノアにいる時で。借家だから。結婚してましたから。

TL: 結婚してね。私もね。だからあの時に両親が来たのは。。。(皆思い出せない) (19) 78年ぐらいかな。一番最初に幸恵と。上の二人。で、下の二人。

YW: で、今は皆ハワイ。

TL: そして、うちの母はとても幸せでした。ハワイ大好き。

YW: 良かったね。沖縄でいじめられたから。

SI: 違うよ。もういじめる方だったと思うよ、おばあさんになってるから。(笑い)

ST: でも今考えると良く覚えて。

CZ: 沖縄の方言をね。。しゃべるのは日本語をしゃべるけど、あれでやってたのだから偉いと思うよ。

ST: 若い時に来たからよ。二十歳かなんかで。だから覚えられたのよ。

CZ: 言葉の端端に方言が出てくるのよ。私、あれ、母ちゃん方言使ってるって。ミセスロジャースに。
(笑い)

ST: 方言つかうようになっていたの？

TL: 言葉の端端にね。

YW: まあ、郷に入っては郷に従えですから。

TL: 彼等と対応するためには言葉をしゃべらんといかんから。今思うと、うちの母は偉かったなあと。

ST: ほんとね。でも過ぎてしまったら。。。

CZ: 偉いと思うよ、本当に。あの具志頭の日本語の共通語使わない方言の社会にいてよ。

ST: 私達方言使わなかったもの。

CZ: 私おばあさんがいたから。

ST: お母さんも同じ部落の人だし。

CZ: そうそう。私は沖縄。で、この人達はハツパだから。でも、人に言われたよ。沖縄だ内地やいわれて、もし日本にいったら、うちなんちゅうて言われる。

ST: うちなんちゅうは何となく良く聞こえるけどね、ないちゃーと言うとね。。。

TL: 日本でもし住んでいたら、うちなんちゅうって差別される。

SI: ハワイでもそうだし。あんたどこ、うちなんちゅう。(笑い)

YW: では、最後になりましたけども、末子様に、あなたは戦争という経験をなされたのですが、その時はアメリカは敵でしたね。でも、子供の時に敵とかなんとか、そういう事は考えなかったですか。

ST: いや、大人たちが言いますからね。アメリカは敵だ。そして皆鬼みたいな顔してるってね。いつもそういう事を私達子供も聞いてました。だから大人たちがそういう話をしていたんでしょう。だから私も怖いんだって。

YW: でもそういう話を聞いた訳ですから、やはりアメリカは怖いと思っていました？

ST: と思っていました。

YW: でも、今は思っていない。

ST: 今は思っていない。全然。それが不思議にね、あんなに嫌な思いさせられた戦争でね、あの時はアメリカ、アメリカ、本当悪いのはアメリカ。自分は日本人だけど、アメリカのアメリカで生まれ育った人と結婚することになるようなんだからね、あの戦争って、誰が悪かったのかなあって思ったりしますよ。

YW: そうですよ。どうしてかと思えますよね。

ST: あんなに虐められて、苦労させられた。それでもアメリカという土地に来てアメリカ人と結婚して、お互い喧嘩していて、どうしてあんな事が出来たんだろうという気持ちもありますよ。だからね、絶対に今から、自分の子供たちには戦争だけはいけない。それは本当に思いますね。もう、自分はそういうあれをしてきたけど、仕方なかったけど、訳も分からずに。でも、今からは子供たちも大人になったら、自分が反対する事出来るように。だから絶対だめと思うようになりましたよ。

YW: 有難うございました。今日は本当に貴重なお話を伺って、皆さん有難うございました。

ST: 戦争すんですぐあの子たちが生まれて来たのも不思議です。（笑い）

TL: 私達がベビーブームじゃない？

CZ: だから、人間ってすごいね。戦争したり、また仲良くなって、アメリカ人と結婚する人がじゃんじゃんいて。終戦後ね、アメリカ人と、兵隊さんと結婚して。敵の国に行くわけでしょう。

TL: 私達みたいに戦争知らないで結婚するんじゃないくて、戦争味わった人達が。

ST: 結婚した女のひとたちが沢山いましたもね。アメリカの兵隊さん達と。

YW: でも、彼女たちは自分が戦争をしようと思ってたわけではなく、ただ、巻き込まれただけですから。

TL: その兵隊さんも自分がやったわけじゃあないけど。

YW: そうですね。もう戦争が終わってしまえば、そんなに憎みあっても仕方ない。

SI: 戦争中は出来ない訳でしょ。

YW: そうです。でももう終わったので良いのですよ。今はアメリカと日本は手をつないで仲良くやっているわけですから。

ST: それは沖縄とアメリカだけではなく、ベトナムとアメリカも同じですよ。結婚して又その子供たちが生まれていますからね。

SI: 戦争ってなんだろう。

ALL: 本当よね。何なんだろう。馬鹿よね。あんなに大勢死んで。何の為に。自分の国の人もいっぱい殺して。殺されて。

TL: 本当に戦争はいけないとしみじみと思うけど、今は戦争知らない人達がいるから。

CZ: この年でも私も戦争わからない。

YW: 実際に経験してないから。

TL: でも、あの時に生きてなくて良かったと。そんな感じ。

(この後も皆さんのいろいろなお話が続きました。)